

お菓子を食べてもなくなる人生は ありうるのか？

——アンガス・ウィルソンの「下宿人というよりは友人」における語り手の姿勢——

丹 治 竜 郎

アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) の短編小説「下宿人というよりは友人」(‘More Friend Than Lodger’) の中で、語り手のジューン・レイヴン (June Raven) は、みずからの結婚についての考え方は「ほとんどあらゆることに対して今のイングランドのほとんどの人がいなく考え方」(68) と同じであると述べている。ジューンは、自分自身の家庭の不安定さ(彼女の家は裕福なので、それは経済的な不安定さではなく、あくまで社会的なものだと彼女は説明している)から逃れるために、安定した家庭出身のヘンリー・レイヴン (Henry Raven) と結婚したのだが、小説中ではジューン一家がどのような仕事をしているのかは述べられていないものの、父親はお金持ちになるのに忙しく、母親は地元の社交界に入り込もうとして失敗を繰り返していたとジューン自身が言っているので、下層中産階級から上層中産階級に成り上がって、あわよくば上流階級にも知己を得たいと望んでいる一家なのではないかと推測される。それに対して、レイヴン一家は、ヘンリーの母親に言わせれば「きちんとした田舎の中産階級」(68)らしいので、おそらく田舎に土地を所有する伝統的な地主階級 (landed gentry) なのだろう。ヘンリーが名門パブリック・スクールのチャーターハウスからオックスフォード大学に進んでいることも、一

家が上層中産階級であることを間接的に示している（ジューンはみずからの学歴について何も述べていないが、フランス語やドイツ語からの翻訳ができるようなので、相当の教育を受けているはずだ）。ジューンが言う社会的な不安定さとは、現在の階級に満足できない上昇志向ゆえのものなのだ。そういうわけで、彼女は階級に安住しているレイヴン家の一員となって安定を手に入れるのだが、そうすると今度は冒険や危険を求めるようになってしまう。安定と冒険を両方手に入れるのは難しいことはわかっているが、それは可能であると信じるのを彼女はやめないのだ。

ジューンは、安定と冒険を同時に求めるこのような態度が同時代のイングラント人全般に見られると言う。「下宿人というよりは友人」はウィルソンの短篇小説集『ちょっと辺鄙なところ、およびその他の物語』(*A Bit off the Map and Other Stories*)に収められている。ウィルソンは1949年に短編小説集『悪い仲間、およびその他の物語』(*The Wrong Set and Other Stories*)によって作家としてデビューし、翌年にも短編小説集『愛すべきお年寄りたち、およびその他の物語』(*Such Darling Dodos and Other Stories*)を発表したあと、1952年に『毒にんじんとその後』(*Hemlock and After*)、1956年には『アングロサクソンの姿勢』(*Anglo-Saxon Attitudes*)という長編小説の力作を続けて刊行した。『ちょっと辺鄙なところ、およびその他の物語』は、『アングロサクソンの姿勢』の翌年に発表されたウィルソンの第三短編小説集となる。つまり、ジューンが述べる同時代のイングランドとは1950年代後半のイングランドのことだ。

では、当時のイングランドはいかなる状況におかれていたのだろうか。この時代のイングランドを揺るがせた大問題は、間違いなくスエズ動乱(*the Suez Crisis*)である。「下宿人というよりは友人」の中でも、ジューンの夫で保守党支持者のヘンリーが、スエズ動乱以後、実は自分自身の中にリベラリズムの血が流れていることを認識するようになったと言ったことが、ジューンによって語られている。スエズ運河は、1869年の開通以降、イギリス（この論文では国名としてイギリスという名称を使い、その

中の一地域を表す名称としてイングランドという表現を用いる)とフランスが共同経営していたのだが、1956年7月26日にエジプト大統領のガマル・アブドゥル・ナーセル (Gamal Abdel Nasser) が国有化を宣言したため、イギリスはフランスと共同で出兵して運河地帯を占領したものの、アメリカの干渉や国際世論の非難を受けて撤退を余儀なくされたのだ。今井宏の言葉を借りれば、この事件は「国際政治の鍵を握るのはアメリカであって、イギリスの帝国主義的な外交の時代は完全に時代遅れのものになったこと」(251)を明らかにしたのである。客観的に見ればそうだろう。しかし、アーサー・マーウィック (Arthur Marwick) は『1945年以降のイギリス社会』(*British Society since 1945*)の中で、イギリス国民が自国の国際的な地位の低下という事実を「消化する」ことができたのは1960年代になってからではないかと述べている(76)。明白な証拠を示すことは難しいが、歴史的な事実と国民の意識のあいだにずれが存在したことは十分ありうるだろう。そうだとすれば、ジューンが言うイングランド人の「不安定さ」とは、戦後インドを始め多くの植民地を失い国際的な地位が低下したという自国の現状を受け入れられずに、スエズ出兵のような無謀な策をとるイギリスという国そのものの「不安定さ」に起因すると考えてよいだろう。

マーウィックは、戦時中およびその後の労働党政権(1945年から1951年まで)下における平等主義的な政策と増税が、どちらかという労働者階級にとって有利な状況を生み出し、中産階級内における下層と上層の差を縮小したことを指摘している。その結果、階級間の境界が流動化すると同時に、階級内部での統合の強化(consolidation)が生じたというのがマーウィックの見方である(21)。階級内部での統合の強化とは、それぞれの階級に属する人々の中で階級意識が強まったことを意味しているのだろう。ヘンリーの母親が自分たちのことを「きちんとした田舎の中産階級」と呼ぶのは、そのような階級意識の強まりを示しているのかもしれない。簡単に言えば、第二次世界大戦もイギリス階級社会の基本構造を変えるこ

とはなかったものの、階級間の移動の可能性は高まり、何世代ものあいだずっと特定の階級に属していた人々はそのような状況に抗して階級意識を強めたのである。

上昇志向の強い、それゆえに安定性に欠ける、おそらくは下層中産階級の家庭に生まれ、その不安定性から逃れるために安定した上層中産階級出身のヘンリー・レイヴンと結婚したジューンが、「下宿人というよりは友人」の語り手である。彼女の語りの中心になるのは、ヘンリーが下級共同経営者 (junior partner) となっている出版社ブロードリック・レイランド (Brodrick Layland) が契約した新進気鋭の作家ロドニー・ゴルト (Rodney Galt) との関係である。彼女は現在 26 歳で、ヘンリーと結婚して五年になるのだが、望んでいた安定した生活が長く続くと、その単調さゆえに退屈を感じるようになる。そんな彼女はロドニーの出現に冒険の可能性を見いだすのだ。

ジューンの語りの内容について見るまえに、ジューンの語りそのものについて少し述べておきたい。彼女は飾らない皮肉な調子でヘンリー、ロドニー、そのほか彼女の周囲にいる人々のことを語る。それは同時代のイングラッド中産階級の人々の生態の興味深い描写となっている。その点で「下宿人というよりは友人」は、ウィルソンのほかの短編小説と共通しているが、この作品においては語り手のジューンが内省的で自己言及的なところに特徴がある。たとえば、物語の冒頭部で、彼女は「ヘンリーについての評言がおそらく私自身について多くのことを語っているだろう」(65) と述べている。作者のウィルソンは、ジューンの皮肉な視点から当時の中産階級の生態を描くと同時に、ジューンの語りを通じて彼女自身がどのような存在なのかを読者に伝わるように仕組んでいるわけだ。この論文では、安定と冒険を同時に求めるジューンの心性を、彼女が語るロドニーについての物語の分析を通して明らかにしたいと考えている。

ジューンがロドニーに冒険の可能性を求めるのは、ヘンリーとの結婚生活が退屈だからである。二人のあいだには最初からあまり愛情もなかった

ようだ。彼女がヘンリーに関して「愛」という言葉を使うのは、「レイヴン一族はみな彼らなりの仕方でも安定している人々だったので、結婚したてのころはヘンリーとの結婚生活の一分一秒に至るまでを愛した」(68)と言っているところだけだ。つまり、彼女がヘンリーと結婚した第一の理由はレイヴン一家の安定性であり、愛は二の次だったとしか思えない。女は極端にハンサムな男が好きではないと母親から言い聞かされていたヘンリーは、学生時代に骨折して鼻がゆがんでいるのでジューンは自分と結婚したのだと思っているのだが、ジューン自身は完璧なくらいハンサムな男が好きなので、自分でお金を出してもかまわないからヘンリーの鼻を直したいと考えている。ヘンリーの曲がった鼻は彼の個性であるが、ジューンはそのような個性よりも無個性的な美しさを男に求めているのである。

ジューンが愛情よりも安定を求めて結婚したことや彼女の表面的な美しさへのこだわりに加えて、夫婦のあいだに子どもがいないことやプライベートを侵されることを嫌うレイヴン一家の性格も原因となり、ジューンとヘンリーの夫婦関係はとて「うつろいやすい」(whimsical) (67)ものになっている。「うつろいやすい」関係とは、ジューン自身の説明によれば、「日常のいさかいを個人的な冗談や「戯れの言い争い」やだいたいにおいてひどくふざけたふるまいによってごまかす」(67)関係ということらしい。このような表層的な夫婦関係が彼女の感じている退屈の一つの原因になっているのだ。「退屈の反対は、一言にして言えば、快楽ではなくして、興奮である」(75)というバートランド・ラッセル (Bertrand Russell) の言葉をここで思い出してみるべきだろう。彼女とヘンリーの関係には深い愛情や激しい口論がもたらすだろう「興奮」が徹底的に欠けているのだ(性的な興奮について言えば、ヘンリーは特定のときにだけ強い性欲を感じ、ジューンは弱いながらもつねに性欲を感じているので、二人の性生活もうまくいっていないようだが、つねに弱い性欲を感じているジューンは興奮とは縁遠い存在ということになるだろう)。

また、彼女は仕事をしておらず、友人もほとんどいないようだ（物語には友人の話はほとんど出てこない）。彼女は時間をもてあましていたので、プロドリック・レイランドのためにフランス語やドイツ語からの翻訳をしたり、刑務所を慈善訪問したりしたのだが、すぐに退屈してしまったのである。それでもジューンは戦争や革命を望んでいるわけではないと言う。戦争や革命は確かに熱狂を引き起こし、退屈を粉碎してくれるだろうが、彼女はそこまでの興奮を望んでいるわけではないのだ。彼女自身が言っているように、その点で彼女はイングランドと似ており、安全・安定を求めていると同時に求めているのではないのだ。つまり、彼女は安全ゆえの退屈から抜け出したいと思っではいるものの、安全な立場を完全に捨て去ることに対してはひるんでしまうのである。第二次世界大戦後、世界帝国からヨーロッパの端の島国へと戻ったイギリス、この国のつねに中枢にあったイングランドが現状を受け入れようとしながら、いまだに帝国主義的な冒険の夢をあきらめられないのと同じように、ジューンも退屈ではあるが少なくとも安定した生活を受け入れようとしながら、同時に退屈を紛らわす冒険を求めてしまうのだ。そのような冒険をあたえてくれそうな存在がロドニー・ゴールトなのである。

ロドニーはスコットランドの建築業者の家に生まれたが、彼は建築業などにはなんの関心もなく、彼の父親の言葉を借りれば「いつも人生に大きな何かを求めていた」(89)。その後、彼は作家として成功し、今ではいわゆるセレブになっている。ヘンリーがロドニーをプロドリック・レイランドに引き抜いたとき、上級共同経営者 (senior partner) であるミスター・プロドリックが喜んだ主な理由は、彼が一、二度しか会ったことのない多くの有名人がロドニーの友人だったからだ。ロドニーはすでにハークネス (Harkness) という出版社から『カックー』 (*Cuckoo*) という本を出していた。それは歴史上有名な寝取られ夫たち (cuckolds) のエピソードを集めたアンソロジーのような作品で、ヘンリーに言わせれば「大きなもうけ」 (a great money-spinner) (65) とはならなかったものの、評判がよ

かったので、ヘンリーは彼をスカウトしたのである。ロドニー自身は独身なので、寝取られ夫などではなく、女性、特に若い女性の誘惑者として悪名高い男なのだ。

彼がブロードリック・レイランドのために書こうとしている本の題名は『名誉と礼節』(Honour and Civility)で、そこでは彼が考える古風な男性的名誉と礼節が論じられ、危険を顧みずに生きることが称揚される貴族的な社会が理想の社会として描き出されることになっていた。ヘンリーはジューンにロドニーの本の内容について説明したあとで、ジューンがハンサムな男性を好きなことを心得ているので、笑いながら、ロドニーがジューンをひるませてしまうかもしれない「マチネーのアイドルのような外見」をしており、「いやらしいくらい的美男子」(67)であることも彼女に教える(これは完璧な美男子が好きだというジューンの主張に対するあてつけであり、ヘンリーがジューンの言ったことをいまだに完全に信じていないことを示している)。さらにヘンリーは「彼はスノップだけれども、だれも腹立たしく感じないほど巨大なスケールの貫禄豊かなスノップなのだ」(66-67)という警告をジューンにあたえる。ヘンリーの話から受けるロドニーの印象がとてもよいものとは言えなかったため、ジューンは「厳密な仕事上の必要性」(67)がないかぎり、ロドニーを家に連れてこないでほしいとヘンリーに頼むのだが、ヘンリーは彼を夕食に招待するのだ。

実際に会ったロドニーはジューンにいかなる印象をあたえたのだろうか。ヘンリーはジューンをからかってロドニーが実際以上にひどい男であるかのように話したので、実際のロドニーはジューンが想像していたほどにはひどくなかったが、それでもかなりひどい男だった。超然とした態度で、いやみなウィットをこめて、聞くに堪えないようなことを平気で言うのである。それでもジューンが彼のウィットに我慢できたのは、彼の声がとてもすてきだったこともあるが、彼がひどいことを言うとき、それがひどいことに聞こえないような仕方と言うからでもあった。

ロドニーのぞっとするような物言いの例としてジューンが挙げているの

は、ユダヤ人についての彼の発言である。ヘンリーが皮肉な調子でロドニーに対して、反ユダヤ人的な人はだいたい自分にはユダヤ人の友人が多いと言うものなので、君にもユダヤ人の友人が多いのだろうねと言うと、ロドニーはユダヤ人の知り合いなど一人もいないし、知り合う場面も想像できないので、自分は反ユダヤ主義者ではないことになるかと答える。絵を買うときに必要があるのでユダヤ人の画商と話をすることはあるが、彼らは知り合いではないし、パレスティナに行くことがあれば、ユダヤ人と知り合うことがあるかもしれないけれども、それは別に必要なことではないだろうとロドニーは続ける。つまりロドニーは彼なりのウィットをこめて、ユダヤ人とは知り合いになどなりたくないという反ユダヤ主義的なことを言っているわけである。ヘンリーの話からロドニーが超保守主義者であることを見当をつけていたジューンは、現在の保守党の基盤を築いたユダヤ系政治家のディズレーリについてはどう思うのかと彼に尋ねる。すると彼が「どうしてそんな不快なことを言えるのかな」と問い返すので、「あなたはトリー（保守党支持者）ではないんですか」と彼女はさらに尋ねるのであるが、それに対して彼は歴史上の超反動的な政治家たちの名前を挙げて、自分は彼らの崇拜者であると答えるのである。そのあと今度はヘンリーが、ディズレーリが築き上げたと言ってもよい大英帝国やスエズ運河についてのロドニーの考えを尋ねると、ロドニーは大英帝国などというものはパブリック・スクールの「尊大な理想」(high-mindedness)の便利なはけ口でしかなかったのだと言って、パブリック・スクールで教育を受けたことを実は誇りに思っているヘンリーをやりこめる(ロドニーの発言は、パブリック・スクールからオックスフォードやケンブリッジに進んだエリートたちが、パブリック・スクールで学んだ規律の精神と西洋・白人中心主義的な思想にもとづいて、植民地統治において中心的な役割を担ったことを皮肉っているのである)(69)。

三人はその夜スノップについてちょっとした議論を交わす。ジューンがロドニーをスノップだと批判すると、彼はスノップでありたいと思ってい

ると答え、今では親交を深めるだけの価値がある上流階級の一族はあまりいなくなりましたが、それでもまだ少しは残っていて、そのような人たちとつきあったことはブルーストの人生を形作ったように自分の人生を形作ってくれたと言う。ジューンが、ブルーストの人生ではなくブルーストの作品を形作ったと言うべきだと反論すると、ロドニーは「芸術と人生は一体なのだ」(71)と主張する。スノップであることを恥じることなく、それを堂々と肯定するロドニーは、ジューンに新鮮な印象をあたえたはずだ。彼女の両親もまたスノップだったが、両親の上昇志向は彼女の不安定感の要因だったからだ。不安定感の裏にはおそらくスノップに対する恥の意識があっただろう。

ロドニーとの最初の夕食で、ジューンは彼について多くのことを知る。彼は、陶器、瑠璃細工、象牙細工などとともに古書も収集しており、その中にはキケロの稀覯本のほかに、彼に言わせれば収集するに値する唯一の好色本(erotica)であるオウィディウスの『恋の歌』(Amores)も含まれているらしい。オウィディウスの話をしているときに彼がふともらした言葉が、ジューンの心に残る。

ローマから追放されたオウィディウスがローマを愛惜する気持ちを歌った詩ほど、私を感動させる文学作品はないね。それはちょうど、教養ある今のイングランド人が生まれた場所に縛りつけられた状態で、地中海地方や、さらに言うならイングランド以外のどんな場所でもいいのだけど、そういう場所のことを考えるときに感じることと同じさ。「そこは魂が息づく場所」というわけだよ。

ジューンはひどく気取ったことを言うものだと思ったのだが、彼女自身どこでもいからイングランド以外の場所に行ければいいのにといつも思っていたので、ロドニーのようにそういう気持ちを素直に表現できない自分自身に罪の意識をいだくのである。スノップであることを恥じることも

なく、自分を縛りつけている生まれ故郷から脱出する夢を臆面もなく語るロドニーの自己肯定的な姿勢が、中産階級的な自己抑制が強いジューンを強く惹きつけるのは当然だろう。

ロドニーはこれまで世界各地を旅してきたようだが、今は執筆以外の仕事のためにジューンと同じようにイングランドに縛りつけられており、上流階級の独身中年女性レイディ・アン・デントン (Lady Ann Denton) の家に居候している。レイディ・アンは古い友人だとロドニーは言い、ジューンはそれを信じる。しかし、あとでヘンリーからレイディ・アンはロドニーの愛人だと聞かされて、困惑する。レイディ・アンは40歳を超えており、ジンの匂いをぶんぶんさせたやつれた感じの女性だからだ。ジューンとヘンリーはレイディ・アンの家でレイディ・アンとロドニーに何度か会う。ロドニーはレイディ・アンの家でゆったりくつろいでいるように見えるが、ジューンはレイディ・アンがそのように見えるようにばかげたほどの努力をしていることに気づく。15歳以上の年齢差や外見の違いからして二人の関係はばかげているのだが、レイディ・アンはそれがばかげたものではないものに見せようと必死に気を遣っているのである。

レイディ・アンはどもりながら母音を引き延ばして話す女性で、それまでの会話の流れからは予想できないことを言って会話を終わらせるという奇妙な癖をもっている。最初のうちは聞いている人にとってその癖はおもしろく思えるものの、彼女との会話はいつもそのような終わり方をするので、すぐにおもしろくなくなるのだ。ジューンはロドニーもレイディ・アンに飽きてきているのではないかと思う。ところが、ロドニーを観察していても、彼はそのような様子をまったく見せない。ジューンはロドニーの態度を立派だと考える一方で、失望も感じる。レイディ・アンとロドニーは見たところ完璧に幸福なカップルのようなのだ。ジューンはいったい何に失望したのか。感情を抑圧しながら表面的には良好な関係を保つという中産階級的で退屈な習慣にロドニーが反逆すること、それをジューンは期待していたのだろう。だが、ロドニーは表層的な礼節を守り続けるのであ

る。彼女は彼に自分自身の生活とは正反対の冒険と危険を期待し、自己抑制とは無縁のふるまいを予想していたのに、裏切られたわけである。この時点ではまだ、ジューンは彼の礼節を守った態度が別の側面を隠す表面でしかないことに気づいていない。ロドニーは芸術と人生は一体だと言ったが、彼自身についてはそうは言えないのである。「名誉」や「礼節」について本を書く芸術家ロドニーは、実のところ、「名誉」や「礼節」からは程遠い別のロドニーを隠す仮面でしかないのだ。ジューンがそのことの気づくのはもう少しあとになる。

ヘンリーはロドニーが「様々な矛盾をかかえた存在」(a mass of contradictions) (72) であると言い、ジューンもそれには同意している。たとえばロドニーはヘンリーと本の話をしたとき、本の内容よりも装丁に強い関心を示す。プロドリック・レイランドと契約したのも、ヘンリーの書籍装丁が気に入ったからだと言うのだ。彼は装丁が本の売上げを大きく左右することを知っているのである。また、ロドニーはヘンリーに頼んで、作家たちがメンバーになっているクラブに入れてもらうのだが、それは仕事ではつねに全力を尽くすべきだと考えているからだと言う。つまり彼は本の売上げに寄与することは何でもするつもりだと言っているのだ。ロドニーは片手間に本を書いて、それがプロの作家が書いた本よりも内容がすぐれたものになってしまうタイプの作家だとジューンは考えていたので、ロドニーのふるまいが矛盾しているように感じられてしまう。ロドニーがハークネスと契約をしていたとき何度も金銭トラブルを起こしていたことを聞いたジューンが言ったように、彼女にとって作家としてのロドニーは「ハークネスやミスター・プロドリックのような人たちのブルジョワ的な規範」(77) にとらわれない存在なのである。そうだからこそ、本の売上げを気にかけるロドニーのブルジョワ的な態度をジューンは矛盾と考えてしまうのだ。しかし、まもなく彼女はそれが矛盾ではないことに気づくことになる。先取りして言ってしまうえば、ロドニーは実際ブルジョワ的な野心たっぷりの男なのだ。

ジューンはレイディ・アンの家でロドニーと何度か会ううちに、彼についてのある「説」(74)を思いつく。彼女はその「説」についてすぐには説明せず、ロドニーがヘンリーとジューンの家の下宿人となっただけについて語る。ロドニーはあっさりレイディ・アンを捨て、若いお金持ちの女性スーザン・マリンス(Susan Mullins)とつきあうようになり、レイディ・アンの家で暮らすことができなくなったロドニーをレイヴン夫妻は下宿人として受け入れることにするのだ。ジューンはこれまで下宿人を置くことをずっと拒絶していたのだが、ロドニーについての「説」が彼をがぜん魅力的で興味深い存在に変えたので、今回はヘンリーの頼みを聞いたのである。ロドニーはこのときまでにすでに新しい本の「すばらしい第一章」(75)を書き上げていて、ミスター・ブロードリックとヘンリーの期待は否が応でも膨らんでいた。しかし、金銭トラブルの話を知っていたミスター・ブロードリックは、ヘンリーがロドニーと個人的な関係をもつことに反対する。そのときジューンが、「すばらしい第一章」を書くようなすぐれた作家の金銭トラブルなど気にしていたら、ブロードリック・レイランドはまともな作家をかかえることはできないだろうと言って、ロドニーを下宿させるようにヘンリーを説得した結果、ロドニーはレイヴン夫妻といっしょに暮らすことになるのである。

もちろんジューンはロドニーに退屈を紛らわす冒険の可能性を見ていたわけである。ところが、ロドニーは最初のうち調べものをするためにこまめに大英図書館に出かけ、それ以外のときはスーザン・マリンスといっしょにいるか、電話で彼女と話をしていたので、ジューンに冒険の機会は訪れない。しかし、すぐに彼は大英図書館通いをやめてしまい、スーザンとの関係もうまくいかなくなる。彼はレイヴン夫妻の家に近いロンドン図書館で本を借りて勉強を続けているようだが、どうやら金銭問題にかなり悩まされているらしいことにジューンは気づく。彼女は、ロドニーの自動車で彼が興味をもっている屋敷や骨董品を見に出かけるようになる。彼はジューンをおだてたり、おどしたりして、彼女をベッドに連れこもうとす

る。しかし、彼女はそれに応じない。女性には支配されることを望んでいるところがあるというのが彼の持論で、ジューンが実は無意識に求めている彼の支配をいつまでも受け入れなければ、彼女はすぐに「しみつたれたつまらない女」(79)になってしまうだろうと彼は言う。文明が彼の誘惑のキーワードで、文明化された時代において不倫は一般的に容認されるとも言う。ジューンは彼の強引な態度と乱暴な言葉を冒険的な経験として楽しみながらも、肉体的な支配を受けることだけは拒絶する。肉体的な関係をもってしまうと、二人の関係が制御不能になるのではないかと恐れているのだ。彼女の人生は退屈でも安定しており、その安定を完全に捨て去る勇気はやはり出ないのである。

こうしてジューンとロドニーは「二重生活」(79)を始めることになる。ロドニーはジューンに対してしつこく求愛を続けるので、彼女は少しばかり気がめいてくる。彼の情熱が彼女に迫る決断が彼女をゆううつな気分にするのだ。その理由について彼女は次のように述べる。

人生に原因と結果が存在せず、あることが別のことを必然的に引き起こすことがなく、ただすべてのことがそれだけで自足していてくれれば、もっとすてきなのに。(82)

ヘンリーのニューヨーク出張のため十日間ロドニーと二人きりで過ごすことになったとき、ジューンはとうとう自分は新しい人生行路に身をゆだねることになってしまったと思いつつ、このあと原因と結果の連鎖が状況を悪化させないことを願う。続けて彼女はこのように考える。

結局私は、人生を今より退屈なものにしないために、新しい人生行路に身をゆだねただけでも、それが私の前にさらなる決断や選択をもたらすだけだったとしたら、人生は今よりもさらにもっと退屈になるだろう。(83)

ジューンの論理はわかりにくい。決断や選択にあふれた人生は退屈ではないはずだろう。彼女が言いたいのは、原因と結果の連鎖自体が退屈だということだ。つまり、どんなに冒険的な決断や選択でも、それが最初の原因となって因果の連鎖を生じさせるとしたら、結局人間はその因果の連鎖に支配された単調な生活を送ることになってしまうのであり、それは退屈を生み出すだけなのである。ジューンは因果の連鎖がもたらす予想可能な未来に退屈を感じていると言い換えてもいいだろう。彼女はロドニーがそのような予測可能だが安全な人生から逃れる機会をあたえてくれると思っていたのである。

ヘンリーが不在のあいだ、ジューンとロドニーはパリ旅行に出かける。パリへの不倫旅行というばかばかしいくらい芝居があったセッティングから、彼女はロドニーが自分をよく理解してくれていることを知る。ジューンはばからしいと思うようなことのほうが悩まずにできるのだ。ばからしいことだと思えば、それをしている自分を本当の自分とは異なる自分とみなすことができるからである。ロドニーはそのようなジューンの性質を、何ごとにも「括弧つき」(in inverted commas) (84) で行おうとする情熱と表現している。何かを「括弧つき」で行うとは、自分の意志ではなく演技しているかのように何かをするという意味だろう。このようにふるまうことによって、ジューンは何かを行う場合それが自分の決断や選択ではないかのようにみなすことができるのだ。ロドニーはジューンのこの性質を利用してパリ旅行に彼女を誘い、彼といっしょに暮らすことに同意させようとしているのである。パリ旅行の最後から二日目にジューンとロドニーはフォンテーヌブローに出かけ、そこでロドニーはジューンに、ヘンリーとの見せかけだけの結婚生活をやめて自分といっしょに暮らそうと迫る。

ジューンはパリ旅行について話し始めた際に、ロドニーに関するみずからの「説」について明らかにしていた。それは、彼が「詐欺師とまでは言わないまでも投機師同然である」(little better or little worse or whatever than an adventurer, not to say a potential crook) (84) というものだった。

彼の電話での会話や彼に届く請求書などから、彼女はロドニーが金銭的に相当困っていることに気づいていた。彼といっしょに暮らすようになれば、すぐに彼は彼女のお金を使いつくし、二人が苦境に陥るのは目に見えている。それでも彼女は、彼の「いんちきなところ、不安定なところ、そしてそれらの下に横たわる泥沼にさえも」(85) 心を惹かれてしまうのだ。だが、ロドニーは彼女のそのような感情に気づかず、いかにもいかさま師のような口調から「あわれな嘘つきの少年」(85) のような口調になって、自分の生い立ちを語り、自分がそこから必死に抜け出そうとしたことを話す。さらに、自分が才能を発揮するためには支えてくれる人が必要であり、ジューンといっしょに暮らすようになれば自分は変わるだろうと言うのだ。ジューンは彼の言葉を聞いてもまったく心が動かない。そしてこう考える。

実際、彼がなんと言おうと、ロドニーとの生活は今彼が約束したようなものとはならず、私が想像したようなものになるだろうと私が確信していなかったとしたら、私はその場で彼を拒絶していただろう。(85)

ロドニーとの冒険の夢をいまだにあきらめきれない彼女は、少し考えさせてほしいと言って、パリでしなればならない仕事がある彼を残して、一人でロンドンに帰るのである。

ジューンがロンドンに戻ったあと、ロドニーがヘンリーの母親から借金をしていたり、ヘンリーの知り合いの室内装飾家のレズビアン・カップルに対して詐欺を働いていたことが明らかになる。ヘンリーの堪忍袋の緒もとうとう切れてしまい、「すばらしい第一章」が完成している本をロドニーがブロードリック・レイランドから出す可能性はついでる。ロドニーに逮捕状が出そうになっている状況の中で、ある日彼からジューンに電話があり、ヘンリーが不在のときに二人は会う。「私たちは長話とさらに

別のこともした」(87)と彼女は言う。長話の中で彼女は、ヘンリーと別れてロドニーと暮らすことをはっきりと拒絶するのである。別のこととはセックスを意味しているのだろう。ジューンに別れを告げられたロドニーは、いつものように彼女が「しみったれたつまらない女」になるだろうと言っておどかすのだが、今の彼女にとって彼の高圧的な態度は退屈なものでしかない。それでも彼女は、ロドニーが海外に逃亡するために必要な費用の足しとして現金を彼に渡そうとする。彼女が現金を探しているあいだ、ロドニーは二階に上がって何かをしている。ロドニーと会って彼の顔を見た途端にジューンがいやな予感を覚え、口実を作って二階に上がり宝石箱を隠しておいたのは正解だったのだ。こうして、あいかわらずハンサムだが、だれかに追われておびえているような表情をしたロドニーは、ジューンの人生から消え去るのである。それでも、「とても魅力的なだれかとのありえたかもしれない異なる人生」(87)を失ってしまったという意識は、彼女の中から消え去ることはない。

一か月後、ローマの貴族の家で金銭を盗んだ罪でロドニーが逮捕されたという記事が新聞に出る。それでもジューンは彼といっしょに過ごしたときの興奮を懐かしく思い出し、したくなかった別れの決断を悔やむのである。だから彼女は、新聞にゴシップ・コラムを書いている友人メアリー・ムディ (Mary Mudie) にロドニーの話をする。メアリーは早速その話を記事にするのだが、そこではロドニーの二重生活 (前途有望な作家であると同時に詐欺師でもあること) にジューンが気づいていなかったと書かれる。つまり、彼女はムディにうそをついたということだ。他方でジューンがロドニーを「下宿人というよりは友人だ」(88)と言ったこともメアリーは記している。ジューンはメアリーにこのように語ることによってだれに何を伝えたかったのだろうか。彼女がこの記事をもっとも読ませたかった相手はヘンリーだったはずだ。彼女は自分自身とロドニーとの本当の関係 (彼女自身の二重生活) を隠しながら、「下宿人というよりは友人だ」という言葉を通じて、ロドニーとのあいだにヘンリーが知らない関係があ

ったことをほのめかしている。ロドニーとの冒険の可能性を奪われた彼女は、ヘンリーとの安定した退屈な関係にちょっとした変化をもたらし、それを少しだけ不安定にしようとしているのである。記事を読んだヘンリーはメアリーに対して立腹するが、自分がメアリーに全部話したのだとジューンが告白すると、そういうことをするのは頭がおかしくなりつつある危険な兆候なので気をつけたほうがいざと警告する。そのあと彼女の前から立ち去るときヘンリーが震えているのを見て、ジューンは彼が自分とロドニーの関係に感づいていたことを知る。それを知っているが隠すことによって、ヘンリーはこれまでと同じような見せかけの関係を保とうとしているのだ。ヘンリーとの関係を多少でも変えようとしたジューンの試みは結局失敗したのである。

ヘンリーやロドニーはジューンに関して「心理的な」(73) 見方を取り、安定と冒険を同時に求めるがゆえの彼女の不安定さを内面的な問題とみなす。ヘンリーは彼女の不安定さを頭がおかしくなる兆候だとみなしたが、ロドニーも彼女に拒絶されたとき、気まぐれで他人をもてあそぶ人間はだいたい頭がおかしくなってしまうものだと書いていたのである。二人はともに、安定と冒険を同時に求めるのは病的な心理であり、それは狂気を招く可能性があると考えているわけだ。「下宿人というよりは友人」という物語は、彼女自身に関するこのような「心理的な」解釈に対抗するために書かれたと考えてよいだろう。物語の最後でも、ジューンは安定と冒険を同時に手に入れることが可能だという信念を表明している。だが、安定と冒険を同時に得られる人生は本当にありうるのか。ジューンの論理によれば、どんな冒険的な決断や選択も、そこから因果の連鎖が生じて退屈なものになってしまうのであるから、安全=退屈と冒険を同時に手に入れるのは不可能なのだ。瞬間的に冒険を味わうことはできても、それはやがて退屈に取って代わられてしまうからである。安定と冒険を同時に得られると信じるのはやはり病的な心理だと言わざるをえない。

それでは、ジューンの心性はどのようなものなのだろうか。ロドニーが

ジューンに向かって指摘したように、彼女はそれを本当に信じているわけではなく、「括弧つき」で信じている、すなわち信じているふりをしているだけだと考えるべきだろう。ロドニーが彼女の「説」どおりの詐欺師だとわかり、冒険を求める彼女の願望が実現しそうになったとき、彼女が彼を拒絶するのは、正真正銘の冒険が実現するとは本気で信じていなかったもので、ひるんでしまったからだ。本気で不可能なことを信じているわけではないとすれば、それは病的な心理ではない。ヘンリーとの安定した結婚生活が引き起こす退屈こそが彼女を狂気に陥らせる可能性が大きいのだ。だから彼女は人生にはつねに冒険の可能性のあることを信じようとするのである。同時代のイングランド人のほとんどが安定と冒険を同時に求めているとジューンが言うのは、そのように考えれば自分も同じようにそう信じるふりをするのが正当化されるからだ。「お菓子を食べてもなくならないこと」(89)、つまり冒険を味わいながら安定も手に入れることを自分はだれよりも強く望んでいるので、いつかはそれを実現できるだろうと思うと最後にジューンは言っている。彼女は自分自身にそう言い聞かせているだけで、それを心から信じているわけではない。しかし、ヘンリーとの安定した退屈な生活にどうにか耐えていくためには、せめて冒険の可能性ぐらいは信じるふりをする必要があるのだ。

*

英語文献からの引用はすべて拙訳であり、括弧内に原書のページ数を記した。

参 考 文 献

- Marwick, Arthur. *British Society since 1945*. Penguin, 1990. Kindle.
Wilson, Angus. 'More Friend Than Lodger'. 1957. *The Penguin Book of Modern British Short Stories*, edited by Malcolm Bradbury, Penguin, 1988, pp. 65-89.
今井宏『ヒストリカル・ガイド イギリス』山川出版社、1993年。
B・ラッセル『幸福論』堀秀彦訳、KADOKAWA、2017年。